第３部　SGH 各活動実施報告

第１章　課題研究

第１節　課題研究基礎

第１項　概要

当講座は探究活動を通して、探究に関わる基本的な手法や技能を学ぶことを目的として、第一学年全員の 360 名を対象に開講した。授業内容は SGH 研究開発委員会と SSH 研究開発委員会が共同で検討し、クラスごとに情報科の教諭が担当した。なお、今年度から教育課程表では課題研究Ⅰとなっているが、 １年次に開講される SG 課題研究Ⅰとの区別を明確にするために、本報告書では昨年通り課題研究基礎と表記する。

当講座は従来、文系と理系に分割し、それぞれから担当教員を配置して実施していたが、文理学科の拡充により、昨年度に文理分け隔てなく探究の手法を学ぶカリキュラムへと刷新した。具体的には、まず、一年間の目的を「研究を行う上で、情報を収集したら終わりではなく、情報を収集したら必ず問いを立てるように習慣づける」とした。その上で、１学期にパソコンを使った情報収集やワープロソフト、表計算ソフトの使い方など ICT スキルに関わる実習を中心に行い、２学期に探究に取り組みながら、探究の手法について学習し、３学期に発表会を実施したり、論文を執筆したりするカリキュラムを実施した。

昨年度、一年間を終えてみて、カリキュラム上で二つの課題が生じた。その一つは探究にあてる期間が２学期だけでは探究活動を十分に行うには短いことであり、もう一つは留学生交流会が終わった後に論文を執筆すると、予備知識の獲得や研究計画の検討が春休み以降になるため、二年次の SG 課題研究Ⅰの研究の進行が遅れることである。そこで、今年度は１学期の５月中旬から研究を開始させ、生徒が研究を進めるために十分な時間を確保できるように改善した。また、３学期の発表会後は次年度の SG 課題研究Ⅰの研究計画の検討に入ることとした。

探究活動を指導する教材や手法なども昨年度に刷新したが、今年度はその効果や問題点を追認するために、大きな変更を行わなかった。

第２項　実施内容

資料１に令和元年度の授業内容の一部を記す。今年度は第三時から探究活動に入った。探究活動では「SDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）に関わる提案」もしくは「家庭でできる自由研究」のどちらか一方のテーマを選択し、３～４人で１班を作り、研究を行わせた。今年度は文科選択希望者のみならず理科選択希望者も多くの生徒が SDGs を選択した。生徒の研究テーマの一部を表 B に示す。

授業展開や指導法については、留学生交流会のポスターの指導の中で一度だけ助言（資

料１、第 16 時）を入れた以外は、ほぼ昨年度の手法を踏襲した。授業では生徒 40 人に対して教員数が１名であるので、ほとんどの時間は研究の内容に関わる指導は行わず、研究の手法についての講義を一斉講義の形で行った。講義の主な内容については資料１の内容の列に示す。また、ほぼ毎回、家庭学習課題を課し、情報の収集と問いづくりを繰り返させた。また、情報の収集、問いづくり、相互評価などほぼすべての活動を A4 判のワークシートの指示で誘導し、ワークシートを一冊のファイルに綴じさせた。その例を資料３に記す。

次年度の SG 課題研究Ⅰへの接続のために、12 月中旬から 1 月中旬にかけて、次年度の課題研究の研究分野を決定した。次いで、留学生との交流会後、３回の授業の中で研究計画書を所定のフォーマットで作成させた。その例を資料４に示す。

第３項　結果と分析

第 19 時の留学生交流会の後、振り返りシートの中で「研究をしてみて、①自分がうまくできるようになったこと、②研究を進めるにあたって疑問に感じていることをまとめましょう。」という問いを設定して、生徒の回答を得た。得た回答の多くは昨年見られた振り返りとほぼ同じであり、「問いを立てられるようになった」、「情報収集の段階で情報に対して疑問や感想といった気づきを得ることができるようになった」という回答が多かった。このことから、このカリキュラムが「研究を行う上で、情報を収集したら終わりではなく、情報を収集したら必ず問いを立てるように習慣づける」という当初のねらいに対して有効に機能していることが示唆される。一方で、「問いを何度も作り続ける意味が分からない」、「研究のゴールが分からない」といった意見が昨年よりも顕著にみられるようになった。

これらの意見が増えた要因を彼らのポートフォリオから探っていくと、前者の「問いを何度も作り続ける意味が分からない」については、昨年度よりも研究にかける期間を長くしたために、教室内でできることをやりつくし、議論を進めるのが困難になりがちであった点が問題と考えられる。この授業では「SDGs に関わる提案」というルールを設けているため、SDGs に対する先入観からか世界規模の大きな課題を扱おうとする生徒が多い。現状のカリキュラムでは毎時間に課題として、問いを立てることとなっているが、熟考を重ねたアクションプランについても、試行することもないまま無理やりにブラッシュアップを強いられ続けるために、不満や不安が募りやすい形式になっている。これに対しては、理系の「家庭でできる」のように「大阪府内で SDGs に関わる提案」のように範囲を絞り検証可能とするなどして、生徒が机の上で思考することにとどまらないように指示を工夫することが求められる。

後者の「研究のゴールがわからない」は「SDGs に関わる提案」というルールが生徒のテーマの発散を抑え、教師が専門とする教科・科目の別によらずにこの授業を実施するため

のものとして作られたために、生徒の多様な興味・関心に応えきれていないことが原因である。つまり、ルールが社会貢献を強調しすぎることで、自分の研究が本当に社会の役に立つのかわからないという迷いや不安につながり、役に立たないものは研究ではないといった誤解につながっている可能性がある。学習指導要領の総合的な探究の時間の部分に記されている「生徒の興味・関心に基づく課題」「職業や自己の進路に関する課題」などへの教員の理解や指導手法の研究を通して､生徒たちが今すぐ役に立つ社会貢献だけでなく、長期的に何かの役に立つ学術的研究も認められるようにルール設定を見直すことが求められる。

資料１　令和元年度　課題研究基礎　授業内容

時	内容	課題
1	〔目標〕LAN 教室の使い方を知る 〔講義〕LAN 教室のパソコンの使い方、アカウント、メールアドレスについて	なし
2	〔目標〕課題研究の進め方を知る 〔講義①〕課題研究の進め方 〔講義②〕今後の授業の進め方	**→授業課題（1）の未消化分**
3、4	〔目標〕情報収集についての基礎知識を知る 〔実習〕Web に書かれている情報を検証するためにはどうしたらよいか 〔講義〕情報操作について、情報の信憑性の評価について、情報の批判的な読み解き、情報源について、検索の方法（and、 or、 not）。	文科：SGDs17 から、興味を持つもの３つの選出と興味を引く点の説明 理科：自由研究事例について、興味を持つもの３例と興味を引く点の説明 **→家庭学習課題（2：本体）**
5	〔目標〕テーマから調査課題までの工程を知る 〔実習〕問いづくり、答え探し、再度作った問いを用いてチーム作り 〔成果物〕問いと答えと次の問い	共通：①　チーム作りで乗っかった問いに各自が問いを二つ足して、三つにする。 ②　それら三つの問いに対して答え探しを行う。 ③　②に対して、三つの問いを設定する。 **→家庭学習課題（3：本体、別添台紙）**

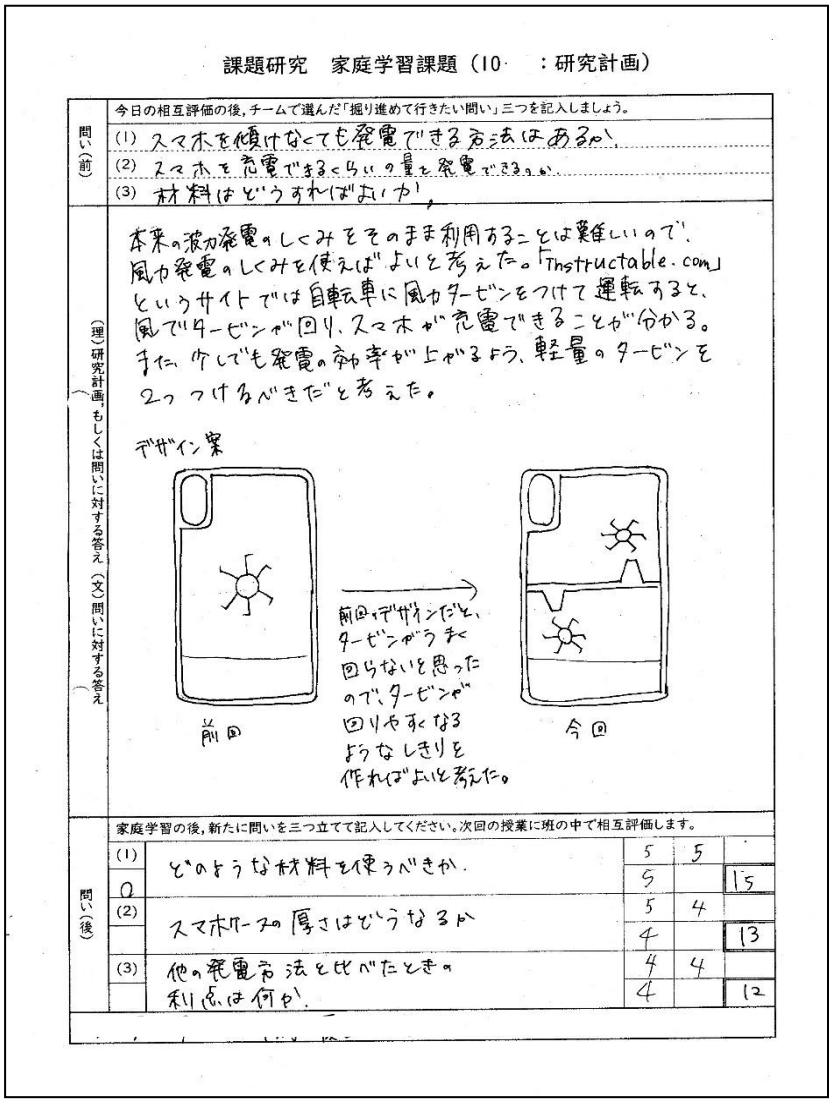
6	〔目標〕実験手法や調査対象などの考え方を知る。 〔講義〕テレビ「トリビアの泉」の調査手法の検討の場面を視聴、調査の準備に関する講義 〔作業〕問いの相互評価 （文）調査対象検討 （理）実験手法検討	文科：相互評価で選ばれた問いから答え探し、問いづくり。 理科：家庭で予備実験を行い、問いを三つ作る **→授業課題（4：研究計画）** **→家庭学習課題（4：別添台紙）**
7	〔目標〕研究を進める 〔講義〕アイデアの作り方、斬新な発想の分析 〔実習〕斬新な発想の分析 **→授業課題（5：発想分析）** 〔作業〕作ってきた問いの相互評価 （文）研究続行 （理）実験手法の検証	文科：情報収集・解決手法の提案 理科：家庭で実験を行う。 **→授業課題（5：研究計画）** **→家庭学習課題（5：別添台紙）**
8、9	〔目標〕研究を一度まとめる 〔講義〕ポスターの最小構成要素 〔作業〕A3 1枚の手書きポスターの作成	文科：A3 1枚の手書きポスターを作成する。 理科：A3 1枚の手書きポスターを作成する。
10	〔目標〕簡単な意見交換会を行う。 〔作業〕ポスターの相互評価 〔成果物〕相互評価ワークシート	文科：研究前半の振り返り 理科：研究前半の振り返り **→授業課題（8：振り返り）**
11	〔目標〕研究を進める 〔講義〕なし （文）研究続行 （理）実験手法の検証	文科：情報収集・解決手法の提案 理科：家庭で実験を行う。 **→授業課題（7：研究計画）** **→家庭学習課題（7：別添台紙）**
12	〔目標〕研究を進める 〔講義〕なし （文）研究続行 （理）実験手法の検証	文科：情報収集・解決手法の提案 理科：家庭で実験を行う。 **→授業課題（8：研究計画）** **→家庭学習課題（8：別添台紙）**
13	〔目標〕研究を進める 〔講義〕当面の目標（授業13回めの留学生交流会）と予定の確認	文科：情報収集・解決手法の提案 理科：家庭で実験を行う。 **→授業課題（9：研究計画）** **→家庭学習課題（9：別添台紙）**

14	〔目標〕研究を進める 〔講義〕研究のブラッシュアップについて（三角ロジック）	文科：情報収集・解決手法の提案 理科：家庭で実験を行う。 **→授業課題（10：研究計画）** **→家庭学習課題（10：別添台紙）**
15	〔目標〕ポスターセッションの準備を進める 〔講義〕ポスターセッションの概要説明 〔作業〕A3 方眼紙に手書きポスターの下書きを作成する。日本語の原稿を作成する。	共通：授業の続き **→授業課題（11-1：ポスターの下書き）** **→授業課題（11-2：日本語原稿）**
16	〔目標〕ポスターセッションの準備を進める 〔作業〕ポスターの下書きをもって、教員に対して発表を行い、セッションを行う。セッションでの質疑応答をすべてワークシートに書き出し、次のアクションを各班で検討する。	共通：授業の続き **→授業課題（11：研究内容カンファレンス＆貢献度調査）**
17、18	〔目標〕セッションの準備を終える 〔作業〕①下書きを基に模造紙一枚に手書きポスターの作成。 ②英語の発表原稿を作成し、発表練習。	共通：授業の続き **→授業課題（12-1：英語の発表原稿）** **→授業課題（12-2：単語帳）**
19	留学生交流会（1/17） 大阪大学の留学生 40 名を招き、9 クラスに分かれてポスターセッションを行う。	共通：ワークシート **→家庭学習課題（13：振り返り）**
20	〔目標〕WWL 講演会で取り扱われるテーマについての予備知識を獲得する。 〔作業〕講師より提示される資料を読み込み、各自が A3 のミニポスターにまとめ、ジグソー法によって小グループでの発表会を実施。	共通：ワークシート、ポスター →　WWL 講演会の事前学習
21、22 23	〔目標〕２年次の課題研究の下調べ 〔作業〕ワークシート	共通：ワークシート **→授業課題（14：2 年次課題研究下調べ）**

資料２　令和元年（令和元年）度の課題研究基礎のテーマの一例

文	インドネシアの不平等を教育から解決する方法の検討
文	アフリカ諸国の水不足に対して簡易ろ過装置の検討
文	南スーダンに向けての最適な募金方法
文	二酸化炭素削減のための公共交通機関利用促進の検討
文	より多くの貧困を救う募金箱の検討
文	パプアニューギニアに住む人々への安全な水の供給
文	途上国の海洋プラスチック流出への対策
文	どんな募金箱が一番お金が集まるのか
文	防災に対する意識の上昇を目的とした防災マップ製作
文	AIによる経済発展は人間に何をもたらすのか
文	アフリカの貧困に対する日本での支援促進方法の検討
文	豊中市におけるCO2排出量の削減方法の検討

理	雑草水素の発生メカニズム解明と効率化に関する研究
理	Cool Summer Challenge
理	燃焼炉とCO2の新しい道しるべ
理	人工指紋によるスマートフォンの指紋認証の実施
理	過冷却水を用いたかき氷の作成
理	蜃気楼を手軽に発生させて町おこし
理	ビル風を弱めて、都市における災害を減らす
理	DNAによる人体への影響とキウイの推奨
理	倒れない図形の本質
理	果物の褐変を防止する新しい方法の検討
理	発電機能を備えたスマートフォンケースの開発
理	アルミホイルによるアイマスクの遮光性向上の検討



課題研究　家庭学習課題（10　：研究計画）

問い（前）

今日の相互評価の後，チームで選んだ「掘り進めて行きたい問い」三つを記入しましょう。

(1) スマホを傾けなくても発電できる方法はあるか。
(2) スマホを充電できるくらいの量を発電できるか。
(3) 材料はどうすればよいか。

（理）研究計画，もしくは問いに対する答え（文）問いに対する答え

本来の波力発電のしくみをそのまま利用することは難しいので、風力発電のしくみを使えばよいと考えた。「Instructable.com」というサイトでは自転車に風力タービンをつけて運転すると、風でタービンが回り、スマホが充電できることが分かる。また、少しでも発電の効率が上がるよう、軽量のタービンを2つつけるべきだと考えた。

デザイン案

問い（後）

家庭学習の後，新たに問いを三つ立てて記入してください。次回の授業に班の中で相互評価します。

(1)	どのような材料を使うべきか。	5	5	
0		5		15
(2)	スマホケースの厚さはどうなるか	5	4	
		4		13
(3)	他の発電方法と比べたときの利点は何か。	4	4	
		4		12

持ち帰る問いを記入

問いの答えを調べる

答えから新たな問いを見つける

資料３　家庭学習課題（実際のサイズはA4判）

2年次課題研究計画書

専攻	地域創生				
1	年	組	番	氏名	

① 研究対象・テーマ （例：フリクションペンについてインクが消えないようにする研究 ）

観光地で起こっている様々な問題に対する対策

② 調べて分かったこと （文献調査をして分かったこと）

外国人観光客の増加により、観光地でのごみやタバコのポイ捨て、公共施設の使い方が悪いなど様々な問題が発生している。また、外国人観光客が増えたことで経済的恩恵を受けている一方で、観光地にダメージを与えてしまうような誤った風習によって頭を悩ませている観光地が増えている。例えば、湖にコインを投げた事による水質汚濁や、嵐山の竹林に名前やイニシャルを刻み付ける行為が相次いでいる。他にも、京都や鎌倉などでは観光客がもたらす騒音がもたらす騒音や混雑のため静穏な生活環境が乱されるなど問題がある。観光客の集中とそれに伴う問題事象を併せて観光公害と言う。
このような事例でも注意を促す立て札を立てる、監視カメラを設置することで自制を促す等といった施策案が検討されているが、景観を損ねる可能性がある等、実施には至っていないことも多い。
嵐山のケースでは入林申請を観光客にしてもらう、という案も出ているが、観光客の足を遠のかせる要因になる可能性もある。しかし、全てが外国人観光客だけによるものではなく、今回の事例でも20年前には既に行われていたという報告もあることから日本人観光客がそのベースを作ってしまっている可能性も否めない。
さらに、インスタ映えによる迷惑行為が問題になることもある。これらは日本人外国人関係なく起こっている問題で中には

③ 調べたことについて思ったこと、考えたこと

外国人観光客の増加により問題が起こるということは、外国人観光客がその観光地でのマナーなどがわかっていないため起こることだと思うが、いろんな言語でパンフレットなどを書いているのにもかかわらず、被害が減らないのはなぜなのかと疑問に思った。
また、その国の風習やマナー、文化によって観光地にダメージを与えてしまうことはどう改善すればよいのかが難しいと考えた。
この観光地での様々な問題は主に外国人観光客によって起こっているという生地などが多いし、実際自分もそう思っていたが、日本人もインスタ映えなどで問題を起こしているから、日本人の行動も考えるべきだと思った。

④ 自分の研究によって解明したいこと

日本人観光客だけでなく外国人観光客にも観光地でのマナーや文化を伝え、守ってもらうようにする対策

⑤ 研究の手順 （理系の場合は実験で必要な機器が明らかになるように）

・外国人がよく訪れる観光地を探す。（インターネットや雑誌など）
・その観光地の中から外国人観光客の増加によって問題が起こっている場所をいくつかにしぼる。
・どのような問題が起こっているか、またどのような対策が行われているか調べる。（インターネットなど）
・すでに行われている対策以外にどのようなことができるか考える。
・参考として、日本人が起こしている問題なども調べてみる。

⑥参考文献 （アドレス、サイト名、著者、題名、ページ数など）

高坂 晶子「求められる観光公害(オーバーツーリズム)への対応：持続可能な観光立国に向けて」
日本総合研究所、ＪＲＩレビュー 2019 Vol.6, No.671, 100-109
https://www.jri.co.jp/MediaLibrary/file/report/jrireview/pdf/10798.pdf

資料４　二年次の研究計画書

第２節　SG 課題研究Ⅰ

令和元年度　第２学年 SGH 課題研究実施日程

		日時		項目	担当者	連携etc.	場所	内容
課題の設定・探究活動	1	4／12(金)	6･7限	課題研究①②	正・副委員長 課研担当者	×	多目的 ４箇所	６【全体集合】オリエンテーション・評価 ７【各VISION】開講式、春期課題の確認etc.
	2	4／19(金)	6･7限	課題研究③④	課研担当者	×	４箇所	【各VISION】
	3	5／10(金)	6･7限	課題研究⑤⑥	課研担当者	×	４箇所	【各VISION】1、2　研究活動 3、4　イスラームに関する講演会
	4	5／17(金)	3･4限	課題研究⑦⑧	課研担当者	×	４箇所	ビジネスプラン出張授業
	5	5／31(金)	6･7限	課題研究⑨⑩	課研担当者	×	４箇所 PC教室	【各VISION】
	6	6／7(金)	6･7限	課題研究⑪⑫	課研担当者	×	４箇所 PC教室	【各VISION】講義のためのQ&A準備
	7	6／14(金)	6･7限	課題研究⑬⑭	課研担当者	外部講師×４	４箇所	【各VISION】講義
	8	7／8(月)	7限	課題研究⑮	課研担当者	×	４箇所	６【各VISION】夏休み前オリエンテーション ７　　夏期休業中の活動確認
調査活動		夏期休業中		全VISION夏休み共通課題 ①FW or レポート作成 ②中間発表に向けて要旨とスライド下書き作成				（初回授業で各担当者へ提出）
課題を深化	9	8／30 (金)	6･7限	課題研究⑯⑰	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】夏期課題の確認etc. 中間発表に向けて
	10	9／13 (金)	6･7限	課題研究⑱⑲	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】
	11	9／20 (金)	6･7限	課題研究⑳㉑	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	６【VISION合同】リハーサル ７【各VISION】修正・反省
	12	9／27 (金)	6･7限	中間発表会			豊中高校	【VISION合同】同時３箇所口頭発表
	13	10／4(金)	6･7限	課題研究㉒㉓	課研担当者	高大連携	４箇所	【各VISION】中間発表反省・課題研究発表会に向けて
課題にアクションする	14	10／25(金)	6･7限	課題研究㉔㉕	課研担当者	高大連携	４箇所	【各VISION】
	15	11／1(金)	6･7限	課題研究㉖㉗	課研担当者	高大連携	４箇所	【各VISION】
	16	11／8(金)	6･7限	課題研究㉘㉙	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】
	17	11／15(金)	6･7限	課題研究㉚㉛	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】
	18	11／22(金)	6･7限	課題研究㉜㉝	課研担当者	高大連携	視聴覚	【各VISION】
	19	11／29(金)	6･7限	課題研究㉞㉟	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】
	20	12／12(木)	7限	課題研究㊱	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】
	21	12／13(金)	6･7限	課題研究㊲㊳	課研担当者	高大連携	４箇所 PC教室	【各VISION】
	22	12／20 (金)	6･7限	課題研究㊴㊵	課研担当者	TA招聘	4箇所 PC教室	【各VISION】冬期休業前オリエンテーション
課題をまとめ発表する		冬期休業中		全VISION冬休み共通課題 ①班でポスター及び要旨下書きを作成 ②個人で「論文執筆のためのワークシート」				（①始業式および②初回授業で各担当者へ提出）
	23	1／10 (金)	6･7限	課題研究㊶㊷	課研担当者	TA招聘	４箇所 PC教室	【各VISION】冬期課題の確認、 豊高プレゼンに向けての準備
	24	1／17 (金)	6･7限	課題研究㊸㊹	課研担当者	TA招聘	２箇所 ４箇所	【各VISION】
	25	1／24(金)	6･7限	課題研究㊺㊻	課研担当者	TA招聘	４箇所 PC教室	【各VISION】
	26	1／31(金)	6･7限	課題研究㊼㊽	課研担当者	TA招聘	豊中高校	６【各VISION】豊高プレゼンに向け準備 ７【各VISION】リハーサル
		2／5(水)	6･7限	生徒研究発表会			４箇所 PC教室	VISION１～４、インドネシアFWの成果
	27	2／14(金)	6･7限	課題研究㊾㊿	課研担当者	×	４箇所 PC教室	６【各VISION】１年総括・論文執筆活動
		2／18(火)		個人論文提出〆切 （各班毎に優秀論文を掲載）				（紙・データ媒体で提出）

第１項　GLOBAL VISION 目的１【担当：千住健太（地歴公民）】

(1)テーマ	「フェアトレード」で生産者の立場に立つビジネスを展開する
(2)学年	第２学年文理学科
(3)対象人数	19 人（男子　５　人、女子　14　人）
(４)班のテーマ	① フェアトレード商品購買意欲促進の工夫
	②　SNS を使って若者にフェアトレードを広める
	③ イベント出店でフェアトレード普及実践を行う ―サヨナラフェアトレード―
	④　マップによるエシカル消費の普及

（５）目的と仮説（構想調書より）

VISION１が当初から掲げてきた目標は次の通りである。「イスラーム世界を始め発展途上国の人びとの貧困を生む原因の一つが、一次産品や手工業製品がグローバル・ビジネスの世界で『適正価格』で取引をされていないことにある。先進諸国で販売されている価格を適正に反映した対価を発展途上国の人びとが得られれば、安定収入につながり、生活の安定をもたらせる。さらに、生産が安定すると雇用も拡大し、この地域の生活・政情を不安定にさせている『貧困』の解消に前進する。そこで、インドネシアの手工業生産者協同組合として日本の企業・NPO 法人とフェアトレードを行っている「APIKRI」（アピクリ）と連携し、現地の一次産品や手工業製品販売のプロデュースをてがけ、企業に提案を行ったり、クラウドファンディングで出資を募ったりする。それにより、現地の人びとの生活が安定するとともに、相互信頼関係に基づくソーシャル・ビジネスが展開できる。」

以上を念頭に置き、昨年度は、社会や企業活動におけるフェアトレードの普及などを通じて、フェアトレードの役割や課題点を発見し、その克服方策などについて研究をすすめた。今年度は、先輩の研究を引き継ぎ、発展させるという方針を最初に明示した上で、各班が社会に対し『具体的行動』を起こすとともに、内容の『発信』を行うよう指導した。

（６）課題研究の概要

４月　課題研究開始　班の確定　研究テーマの設定

研究テーマの設定。春休みに課題としてフェアトレードに関する文献講読を行った。それをもとに、生徒が興味あるジャンルを①フェアトレードの普及②フェアトレード団体（NPO や企業）③フェアトレードの理念と現実④フェアトレード認証機関の４項目に絞り、興味を同じくする者が集まりグループを形成した。さらにそのグループ内で具体的な研究テーマについて討論する機会をもった。

５月　フェアトレードの理解１

今年度は SGH 事業の最終年度ということもあって、この４年間の先輩たちの先行研究について、様々な意見を出し合いながら、自分たちのリサーチクエスチョンを掘り下げていった。そして、それを他のグループに対して、「今年度どのような研究活動を行い、目標とする最終成果を掲げる」というプレゼンテーションを行わせた。各生徒はこのプレゼンテーションをすべて見た上で、最終的に研究したいテーマを選択し、班の決定を行った。プレゼンを行わせたことで、想定していたより多くの生徒が他のテーマへ移るなど、興味・関心に基づいた班決定がなされた。

６月　フェアトレードの理解２

５月に JICA 関西で開催された国際協力セミナーにおいて、フェアトレードの普及・実践団体として招待され、パネルディスカッションに生徒が参加し、展示ブースなども出展した。このイベントに参加されていた、長年、関西でフェアトレード商品

の輸入・販売・普及に関わってきた、社団法人日本フェアトレードフォーラムの代表理事である小吹岳志氏に来校いただき、講義をしていただいた。フェアトレードタウン運動の推進や、実際に商品を取り扱った時のエピソード、各班の研究構想に対しても助言をいただいた。この講演をきっかけに、本来の貿易のあり方やフェアトレードの意義に大きな気付きがあり、以降、各班の研究テーマがはっきりと輪郭を帯びたものへとなっていった。実際に、④班は小吹氏からいただいた名古屋市（いずれもフェアトレードタウンに認定）のフェアトレードマップを参考に、豊中市域でのエシカル商品のマップ作成という研究テーマを推進することになった。

８月　夏休みの課題

夏休みの課題として、班ごとに自分たちのテーマに近い取材対象を探しフィールドワークあるいは外部団体と連携した取組みを行うことを課した。フェアトレードショップ、NPO、企業、サークル、自治体などを対象とした。フィールドワークは、計画書を提出させ、あらかじめ、フィールドワークを研究の中でどのように位置づけさせるかを十分検討させた上で実施して、終了後、その後の研究計画などと含めて班ごとに報告書を提出した。訪問先は次の通りである。

①班　フェアトレードショップ　シサム工房　もりのみやキューズモール店訪問

フェアトレード商品の購買意欲を促進するために、まずはフェアトレードショップを実際に訪問・調査を行い、現状を把握したうえで、改善や改革を起こせる点を探る目的で行った。実際に店長にインタビューを行ったり、顧客の店内での行動を観察する中で、商品の POP やタグに着目して研究をすすめることとなった。

②班　フェアトレードショップ＆カフェ　エスペーロ能勢訪問

若者の消費行動を研究していく中で、どのような消費であればフェアトレード商品を無理なく購入してもらえそうかを検討し、カフェやスィーツショップでのフェアトレード商品の展開が最も SNS を利用した普及に適しているのではないかという仮説を立てた。大阪でも珍しい、フェアトレードカフェであるエスペーロ能勢を訪問し、実際に試食やインタビューを通して、商品の魅力をどのようにすれば SNS で普及できるか、そして、SNS で多くの評価が得られる商品づくりを自分たちで行うという方向で研究をすすめることとなった。

③班　神戸大学国際協力団体 NGO『PEPUP』訪問

イベントへの出店をめざす③班は、イベントの出店経験が豊富な神戸大学のフェアトレード団体である PEPUP を訪問し、どのような購買層に照準を絞り、普及をめざすのか、どのような商品を販売するのかなど、イベント出店する際のポイントなど経験に基づいた助言を得た。さらに、イベントを出店した際の、フェアトレード商品の卸売り支援も得ることができた。以後、自分たちの目標が最も効果的に達成することのできるイベントを模索し、生徒たち自ら出店交渉を行った。

④班　市場調査（豊中高校近辺の小売り店舗 15 店でエシカル商品の販売調査）

まずは、エシカル商品の販売されている店舗などを記載したエシカルマップを作成するために、豊中高校から比較的近いエリアの小売店を実際に訪問し、インタビュー調査などを行った。その際、対象としたのはフェアトレード認証マークとレインフォレストアライアンスマーク（熱帯雨林の保持に配慮した商品）のついた商品である。思っていた以上に多くのお店に商品が置かれていたことが分かり、知らない人に知ってもらいたいという信念をもって、これらのお店や商品の情報が記されたエシカルマップの作成に取りかかった。

９月　研究テーマの確定

各班とも中間発表会に向けてテーマを確定させた。先行研究の蓄積を利用したため、途中でテーマの変更などをすることもなく、各班が研究を継続した。

10 月　課題研究中間発表会

各班とも６分間のパワーポイントによる口頭発表を行った。運営指導委員の方に評価をしていただき、今後の指針を構築することができた。発表が短時間であったため、研究の動機や進捗状況の発表にとどまった。

11 月～２月　研究の継続発展

①班はタグや POP を作成し、また、店内 BGM での効果にも着目し、自分たちで BGM を作成し、イベント出店を決めた③班の商品販売時に店内で流すことになった。また、タグに QR コードを印刷し、その QR コードとリンクしたホームページを実際に作成した。

②班は、SNS で評価を受け、普及を促進するようなフェアトレードスィーツの模索を行い、実際に材料の選定やスィーツの配色を含めたデザイン、原価計算などを行った上で、学校で試作し、課題などを検討した。そのうえで、以前からアドバイスを受けるなどしていた豊中高校近くのスィーツショップ「54CLOSET」を訪問し、考案したフェアトレードスィーツの販売を依頼した。結果として、１月の第３週に限定発売することとなった。販売に向けて、SNS アカウントを開設し、試作品などの投稿を行ったり、販売時の装飾を準備したり販売のプロデュースを店と相談しながら行った。

③班は 11 月に万博記念公園で行われた「持続可能な社会」をテーマとしたイベントであるロハスフェスタへの出店を運営本部と交渉し確定させた。その後は、どのような商品を仕入れ、どのような販売方法を行うか、どのような普及企画を行うかなど、自分たちの店づくりに取り組んだ。商品は、過去５年で関わってきたフェアトレード団体から様々な商品を卸売りして頂き、過去の先行研究も店舗で紹介するなど SGH 事業５年間の総決算のような内容で出店を行った。このロハスフェスタでの売り上げや経験、アンケートの結果などから研究のまとめを行った。

④班は、11 月に開催されたロハスフェスタの出店にあわせて、豊中高校近辺にあるエシカル商品のマップを実際に設置し、アンケートを実施してマップの改良点や効果を確認した。これらのフィードバックを反映させたマップを再度構成しなおし、実際にリーフレットの形として完成させることができた。さらに、街のどのような場所に、どのようなシチュエーションで設置すれば多くの人に効率的に普及できるかの検討をすすめた。

12 月～１月　冬休み課題

各班に対して、課題研究成果発表会に向けての①要旨、②ポスターまたはスライドを作成し、提出を求めた。また、各個人に対しては、論文執筆に向けての③ワークシートを課した。①～③については、不十分な点や補強が必要な部分に朱書きし、生徒に返却。これらをもとに、生徒たちは再検討を行った。

２月の成果発表会に向けて各班のポスター作成・口頭発表準備を行った。授業の中だけでは間に合わず、すべての班が、昼休みや放課後、休日の部活動後など、空いた時間を活用して、妥協なく成果物の作成ができた。

２月　課題研究成果発表会

①班は、ポスターの中に、タグへ記載する QR コードを貼り付け、聴衆のスマートフォンを使って自分たちで作成したホームページを閲覧するデモンストレーション

を行った。また、実際に作成した４種類のフェアトレード商品の POP を展示し、聴衆にどの POP が最も購買意欲を促進するか選んでもらうなど魅力的なプレゼンテーションを行った。②班は SNS のフォロワーも多く、注目度も高かったのか、ポスター発表でも聴衆は特に多く、研究の内容・実践の行動力が高く、正しいプロセスで自分たちの仮説の検証を行った研究について要点を絞ったプレゼンテーションを行った。③班は Vision1 の代表として、成果発表会で口頭発表を行い、また、豊中高校の代表として GLHS の合同発表会においても口頭発表を行った。イベントの出店の成果発表にとどまることなく、なぜこんなにフェアであることを強調しなければならないのかという、そもそもの部分に関して研究をすすめ、根本の問題点に焦点をあてながら、聴衆にメッセージを送るという発展的なプレゼンテーションとなった。④班は自分たちの試作したエシカルマップを会場に持ち込み、ポスターだけでなく実際の成果物を用いて説得力のあるプレゼンテーションを行った。聴衆からも、この店舗にこんな商品があるのかといった驚きの声があがるなど、研究の意義を改めて実感できた時間となった。発表会の後、その評価や意見をもとにさらに考察を深め、各自が研究内容を論文にまとめた。

○ 指導に留意した点

生徒が自主的に研究を進めることを基本としたが、各グループと頻繁に面談を行い、方向性について話し合った。その際、読んでおくべき文献、訪問して取材すべき団体などについて助言を与えた。また４つの班からなる VISION の一体性を保ち、各班の交流を促すため、授業の最後に、取組み進捗状況と研究の方向性を互いにスピーチを行った。

ここ数年の課題であった各班の連携が最もとれた１年となり互いの研究の成果をシェア・利用し、③班のロハスフェスタ出店に際し、他の班がアンケートを実施したり、SNS で告知したりと、大きな成果となった。VISION メンバーで班を飛び越えて、より広範囲でより大きな取組みにつながる「チームフェアトレード」という、新たな形を創出することができた。

（７）課題研究の成果

■各班の研究成果

①班　フェアトレード商品購買意欲促進の工夫

特に今年度は SGH 最終年度ということもあり、最終成果という部分を強調する成果発表ができた。①班は過去多くの班が研究してきた内容を踏まえて、店頭での販売促進を QR コードとホームページでフェアトレード商品の魅力を発信するという形を作ることができた。

②班　SNS を使って若者にフェアトレードを広める

高校生がフェアトレードを全く知らない店に意義や魅力・売り方や商品の提案を行い、実際に店舗で販売し、フェアトレード商品を用いて、たった数日間で５万円以上の売り上げを獲得することができた。SNS のフォロワーの数も多く、店頭で行ったアンケートにおいても、SNS での告知が大きな影響を与えたことが分かった。

③班　イベント出店でフェアトレード普及実践を行う

高校生ができるフェアトレード普及・実践を求めて、イベント出店を行い、実際に商品を仕入れて、商品を販売し、利益をあげることができた。この５年間で関わってきた様々なフェアトレード団体からのサポートを得て、フェアトレードのビジネスモデルを体験し、多くの課題や成果、気づきを得たうえで、今後フェアトレードの進むべき形の提案をできた。

④班　マップによるエシカル消費の普及

フェアトレード商品よりも対象となる範囲を広げることで、よりたくさんのエシカル商

品が身のまわりにあることを理解してもらい、実際の消費行動につなげることを目的として活動し、エシカルマップが完成した。完成したマップはリーフレットの形にし、成果発表会でも多くの賛同を得た。ロハスフェスタにおいても、自分の住んでいる街のエシカルマップが見たいという意見が多くあり、５年前の先行研究時よりも、消費者意識が大きく変化していることもわかった。実際のリーフレットの完成までできたことは大きな成果であった。

■大学進学関係（大阪大学入試）
VISION１からは昨年度１名が大阪大学外国語学部の AO 入試を受験し、課題研究の成果などを成果物として提出し、合格した。

（８）課題研究の今後の課題

■イスラームとの関連性
今年度ロハスフェスタで販売したチョコレートはインドネシアのスラウェシ島のカカオを使用しており、多少ともイスラーム地域の雰囲気を知ることができた。過去数年、販売商品として取り扱ってきたなかでも、海外 FW を通じて生産者の方との交流なども行い、イスラーム圏の生産背景なども学ぶことができた。今後はイスラーム地域にあるフェアトレードタウンの活動・イスラーム金融を利用したフェアトレード資金の調達の可能性などの研究も検討する。また、他の VISION（たとえば VISION３や４）と連携することも視野に入れていく。

■フェアトレードの実践
VISION１では、フェアトレードについての研究だけでなく実践に重点を置いて取り組んだ。何よりも大きく目標としてきた生徒たちの実践経験を多く獲得できた１年であり、これらの研究や経験を学校の財産として保持、共有していかなければならないと感じる。特に、高校生の提案するビジネスモデルという点では、最終成果という形で２つの形を提示することができた。１つは、生徒自身が販売する場所をイベントで創出し、自らの主張とともに、自分たちでセレクトした魅力ある商品を販売し、利益をあげるという形である。もう１つは、研究で得た知識や自分たちの思いを PR することで、地域の既存店に協力してもらいながら、フェアトレードビジネスの裾野を広げていくことである。どちらも高校生の活力を利用して、地域レベルから行動・発信し、より豊かな地球社会をめざしていくものである。「Think Globally, Act Locally」を体現する「チームフェアトレード」がこの５年で出来上がった。生徒各々が、この課題研究の活動の中で、多くの外部団体の方に関わり、そういった方々の思いに触れ、自らを育み、この先の世界の担い手は自分たちであると世界市民である自覚を持ち、積極的な学びと行動を継続してくれることを期待する。

ロハスフェスタ出店の様子

提案し、販売したスィーツ

第２項　GLOBAL VISION 目的２【担当：渡辺尚樹（地歴公民）】

（1）テーマ	「地球環境問題（再生可能エネルギーの活用）」を学び、生活者の立場に立つビジネスを展開する
（2）学年	第２学年文理学科
（3）対象人数	17 人（男子 12 人、女子５人）
（4）班のテーマ	①　観光地におけるゴミのポイ捨ての減少
	②　公共施設における自然エネルギーの導入について
	③　洋上風力発電の有益性について
	④　原子力の未来

（５）本年度の目的と仮説（構想調書より）

VISION２が当初から掲げてきた目標は次の通りである。「地球環境問題はイスラーム諸国を始め発展途上国の人びとの生活を脅かしている。人々にとってくらしの脅威となっている地球環境問題の実態を調べ、日本の技術とのマッチングにより問題解決方向に向かえば、現地の人びとの生活が安定するとともに、相互信頼関係に基づくビジネスを展開できる。対象としてインドネシアでのフィールドワークで、日本の技術とのマッチングを探る。」

以上の目標に向かって、日本や発展途上国を始めとした世界各国のエネルギー事情について学習するとともに、現在各国が打ち出している政策について情報を収集する。特に電力供給と地球環境について理解を深めるため、原子力・風力・太陽光・小水力発電等について学ぶ。

（６）課題研究の概要

３月　春期休業中の課題

VISION２を進めるに当たり、基礎的な知識を学ぶことを目的として、春休み中に文献講読の課題を課した。文献は地球環境・エネルギーに関する書籍や学術論文とし、特に指定せず各自で選択することとした。それを本校が独自に作成した「文献調査票」に記入して提出。

４月　課題研究開始

・課題研究の概要について確認した。

・春季休業中の課題の共有とテーマの抽出

春休みの課題をもとに、ブレインストーミングの手法を用いて生徒の興味・関心をまとめさせ、現代社会における課題を抽出させた。

班・研究テーマの形成

・班の形成

興味関心のあるテーマが近い者同士で集まり、班を仮決定した。また、班ごとに昨年度の生徒の研究を読ませ、興味深いところや不足しているところについて考えさせた。

・主要図書の選定

昨年度までに購入した図書や論文から、自分たちの班の関心に近いものを探し、班で共有した。個人で文献リストをつくり、情報を記録するように指示し、また、今年度新しく購入したい本を生徒から募集した。

５月　講師招聘

・講師からのアドバイス

5 月 10 日に関西電力大阪支社の方々（３名）による、エネルギー情勢や電力全般について、環境問題への対応、まちづくりと再生可能エネルギーについての

講義を受講した。その後、班の研究テーマとその見通しについて個別にアドバイスをいただいた。

・リサーチクエスチョンの洗練
講師による講義を受けて、生徒にリサーチクエスチョン(疑問点)を出させ、その問いをより具体的なものを問う内容へと磨き上げる作業を行い、班のリサーチクエスチョンを決定した。

・ビジネスプランについての学習

5 月 17 日高校生ビジネスプラン・グランプリ事務局（日本政策金融公庫　国民生活事業本部　南近畿地区　大阪創業センター）６名来校。「ビジネスプラン作成サポート授業」を受講。ビジネスプランの考え方について学んだ。

６月　講師招聘

・講師からのアドバイス
６月 14 日に関西電力大阪支社の方々（３名）が来校。現時点での調査・研究を通して得た事項をまとめ、課題設定・仮説・調査方法などを整理し、班ごとに発表する。講師の方々から学問的指導・助言を得た。

７・８月　夏季休暇中の課題

・メールと電話の基本事項についてロールプレイング
メールと電話の形式やマナーについて講義をし、相手の不在などの様々なパターンを考慮して、ペアでロールプレイングを行った。

・夏季休暇中の課題
夏休み課題として、（１）夏休み中にフィールドワークに行く、（２）自分たちの研究に関連する書籍・学術論文を読んでレポートを書く、のいずれかを選択させ、全員に中間発表に向けて「スライド下書き」（スライド６枚以上、所定用紙）、「要旨下書き」（所定用紙）の提出をもとめた。

・フィールドワークの実施①
８月７日に、関西電力株式会社大飯原子力発電所を訪問し、その施設を見学し、お話をうかがった。

・フィールドワークの実施②
８月８日に、大阪府咲洲庁舎を訪問し、大阪府エネルギー対策課スマートエネルギーグループを訪問し再生可能エネルギー導入の実例などの話をうかがった。

・フィールドワークの実施③
８月 19 日に、大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学科の北田孝典教授の研究室を訪問し、原子力発電の必要性や安全性について質問し、話をうかがった。

・フィールドワークの実施④
８月 21 日に、京都嵐山の嵐山保勝会代表　田中氏を訪問し、嵐山のごみの現状についてお話をうかがった。

・フィールドワークの実施⑤
８月 29 日に、関西電力株式会社大阪支社を訪問し、洋上風力発電について学習した。

夏休み明け　８月 30 日（金）

・夏休み課題を回収し、「課題研究　研究発表の骨子」を用いて各班で取り組んだ後、役割分担し、「中間発表に向けてのエントリーシート」の入力、相互評価シートを用いて、各班の中で、生徒たちが優秀と判断した「要旨」「スライド」の下書きを評価した。その後、要旨作成・スライド作成・研究の深化と役割分担を行い、各々作業を行った。

9月　課題研究中間発表会

・中間発表会に向けての準備

9月27日の課題研究中間発表に向けて、4班それぞれがアブストラクトとパワーポイントを作成した。その際に「中心となる問い」や「そのテーマを研究する背景・意義・重要性」などを意識させ、一貫性のある論理的な流れになるよう指導を行った。また、9月20日にはリハーサルを行い、生徒同士で質疑応答を練習させた。

・中間発表会での助言

9月27日に課題研究中間発表会を行い、他校教員・運営指導委員からは「エネルギー問題を扱っている班は、メリット・デメリットを把握して今後どのように発展させていくかが課題。」「環境問題のフィールドワークは興味深い。」等の助言をいただいた。また、生徒同士の相互評価を行った。

10月　中間発表フィードバック

・運営指導委員、他校教員のコメントを伝えた。生徒相互評価の結果も伝え、今後の研究の参考にした。

11月　調査・研究の続行

・校内アンケートの実施

11月中旬に、本校第2学年生徒160名を対象として、生徒4名が「原子力発電に関するアンケート」を実施した。

三角ロジック講習会

・論理的思考・表現のツールとして「三角ロジック」を用いて、簡単なワークを行い、その後、自分たちの研究が論理的に成り立っているかどうか、実際に自分たちの研究に当てはめて検討した。

12月　調査・研究のまとめに向けて

・「研究発表の骨子」の活用

中間発表後に研究を整理するために、7月に行った「課題研究　研究発表の骨子」を再度行った。生徒たちは、新たにフィールドワークに行ったことやアンケート調査を行ったことを7月に作成した「研究発表の骨子」に追加した。各担当教員で点検し、生徒に返却した。

・フィールドワークの実施⑥

12月19日に、豊中市立東豊台小学校を訪問し、4年生に洋上風力発電の授業を実施した。

・スムーススペースを使った能勢高校3年生との交流

12月17日に、スムーススペースを使って能勢高校3年生と研究発表会を行った。質疑応答では活発に議論がなされ、研究がより深まった。

・全国高校生フォーラムへの参加

12月22日に東京国際フォーラムで行われた全国高校生フォーラムに参加。午前中は分科会、午後はポスター発表を行い、全国の高校生と交流した。

・冬季休暇中の課題

各班に対して、課題研究成果発表会に向けての①要旨、②ポスターまたはスライドを作成し、提出を求めた。また、各個人に対しては、論文執筆に向けての③ワークシートを課した。①～③については、不十分な点や補強が必要な部分に朱書きし、生徒に返却。これらをもとに、生徒たちは再検討を行った。

1月　最終発表に向けて

・フィールドワークの実施⑦

１月 12 日に、京都嵐山の竹林の小径を訪問し、自作したポスターの効果を検証した。

・課題研究発表会への準備

２月７日の発表会に向け、３班はポスター、１班はパワーポイントを完成させた。1 月 31 日にはポスター発表班は VISION 内で、口頭発表班は VISION1、VISION 3、VISION 4 と合同でリハーサルを行い、生徒同士で相互評価を行った。

２月　課題研究成果発表会

・課題研究発表会後の助言

発表会後に、外部来賓・運営指導委員からいただいた助言と生徒からのコメントシートを授業で共有した。また、生徒同士で書かせた質問について採点をし、その後の研究における課題を班で共有した。

・論文の作成

（７）課題研究の成果

■形式面について

運営指導委員からも「構成がしっかりしている」と評価されたように、研究の枠組み作りについてはある程度の成果が得られた。また、「研究発表の骨子」を用いることにより、「論理的な検証かどうか」「結果と考察と結論の関係がまとまっているか」などについて班で議論する機会を十分に取ることができた。

■研究内容について

昨年度と同様に、VISION２の全班・全員にフィールドワークに行くという課題を課した上、そのフィールドワーク先を生徒自身に見つけさせ、班ごとに別の活動をさせることができた。さらに、今年度は２回めのフィールドワークに行く班もみられた。班ごとに研究を重ね、新しい課題を見つけて有識者を訪問し学習する流れが形作られてきたと考えている。

一昨年度の課題から、昨年度と同様に、テーマを大きくしすぎないよう絞っていくことを指導上の留意点とした。結果、多くの班が自らの能力で結論に到達していた。なかには、研究の過程において専門知識を得て、フィールドワークで現状を学習したところ、初めの仮説とは異なる結論に到達した班もみられたが、柔軟に受け止めて研究を進められていた。

先行研究の調査については、書籍や論文、電力会社や地方自治体のホームページなどから詳細なデータを参照することにより、より具体的・専門的な根拠に基づいた研究活動を行うに至った。

（８）課題研究の今後の課題

■イスラームとの関係性・ビジネスの展開について

一昨年度からの課題として「イスラームとの関係性」と「ビジネスの展開」があるが、今年度は、再生可能エネルギー班がビジネスプランの策定まで研究をすすめることができた。豊中高校を「ZERO ENERGY SCHOOL」とするための費用を、ファンドを利用して民間から資金調達するものである。10 年間で返済する計画で、調達だけでなく返済まで研究したことは評価できる。また、洋上風力班が再生可能エネルギーの中で、洋上風力発電を有望なエネルギーとして研究した。２月に日本初の大型の洋上風力発電の商用運転の事業化が決定したとの報道があり、洋上風力班の研究が正しいことが示された。

■研究の計画について

今年度、洋上風力班が普及のための授業案を作成し、実際に授業を行うことができた。昨年度は最終目標までいたらなかった班があったという反省から、今年度は研究計画を早めに考えさせていたので、その成果が出たと思われる。

例年、６月に実施された講師による講義・アドバイスを５月に実施し、エネルギー情勢や電力全般についての基礎知識を学び、研究方法についてのアドバイスをいただいた。そして６月に再度講師に来ていただき、各班がそれまでの研究成果を発表し、アドバイスをいただいた。これにより、すべての班に研究に対する姿勢や意欲、具体性の向上がみられた。このような変化は、VISION２では基礎知識として比較的専門性の高い内容を要求されるためであると考えられる。早い段階で講師を招聘し、研究を深化させる期間を長く設定することは有効である。

第３項　GLOBAL VISION 目的３【担当：森口竜平（地歴公民）・加藤康恵（地歴公民）】

（1）テーマ	日本とイスラーム諸国の探究から、 イスラーム社会へのソーシャル･ビジネス･プランを提案する
（2）学年	第2学年文理学科
（3）対象人数	44 人（男子 19 人、女子 25 人）
(4)班のテーマ	① フードピクト利用によるヴィーガンレストランのムスリムフレンドリー化
	② ムスリムの人々がより日本で観光を楽しむために
	③ 訪日ムスリムのお土産の選択肢を増やすための提案
	④ ムスリムがテーマパークを楽しめるようにするために
	⑤ コーヒーでイエメンを救う
	⑥ 日本のムスリム観光客を増やそう
	⑦ ムスリム留学生が日本で快適な生活を送れるようにするために
	⑧ ムスリム留学生が便利に買い物をするために
	⑨ UAE 向けの和食のメニューを作ろう

（５）目的と仮説（構想調書より）

VISION３が当初から掲げてきた目標は次の通りである。「現在、イスラーム問題がわからないと世界情勢や経済を語れない時代となってきた。イスラーム世界の盟主の一つであり、日本と同様に長い歴史と独自の文化・言語をもつトルコと日本には、エルトゥールル号遭難事件、イラン・イラク戦争時の邦人救出劇を始めとする誇るべき友好の歴史の蓄積がある。両国が培ってきた絆の歴史的・文化的・社会的過程を探究することで、トルコという国を通して、ステレオタイプではないイスラーム社会の理解を深め、ソーシャル・ビジネス・プランを提案できる。」

以上を目標としていたが、トルコの治安悪化等の影響をうけ、トルコ以外のイスラーム諸国にも対象を広げることにした。イスラーム諸国の歴史的・文化的・社会的過程について文献等を中心に調べる。また、提携大学の留学生や出身者からも情報を得、近隣のモスクや NGO の団体等にも見学に行き、参考にする。そのような活動の中で、イスラーム社会の理解を深め、日本との違いに着目し、日本とイスラーム諸国との良好な関係を作り出すような、ソーシャル・ビジネス・プランや国際貢献を考える。

（６）課題研究の概要

３月　春休み課題

自分の所属予定の VISION に関する文献（書籍１冊、学術論文１冊）を読み、本校が独自に作成した「文献調査票」に記入して提出。

４月　課題研究開始

・課題研究の評価・文献リスト作成についての説明

・研究班結成と仮テーマ設定

春休み課題をもとに、自分の興味がある国や地域ごとでグループに分かれ、ブレインストーミングの手法を用いて、自分たちの興味関心をまとめさせた。人数・男女比を精査し、研究班を決定した。各班にて、まず各国の歴史的・文化的・社会的過程について文献等で調べ、各自が興味のある仮テーマを設定する。その際、昨年度の研究や、「イスラーム」「日本との関係」「国際貢献」についての関連を考慮させた。

５月　テーマの確定

・テーマの確定
設定した仮テーマについて、どのような仮説が考えられるか検討し、研究対象としてより有意義なテーマに絞り込む。そのテーマに沿って、調査・研究の方法を考える。
・主要図書の選定
昨年度までに購入した図書の中から、自分たちの班の関心に近いものを探させ、その図書を班で共有させた。また、今年度新しく購入したい本を生徒たちから募った。
・イスラームに関する講演会
５月 10 日　一般社団法人日本ムスリム支援協会代表理事・Washoku Home Cooking Machiko 主宰　松本真智子様にお越しいただき、イスラームへの理解を深めるために「イスラームに関する講演会」を実施。「日本のムスリム対応の現状およびイスラームについて研究をしていく上で大切なこと」というテーマで、松本様のご活動内容やムスリムの方々をお迎えする際に気をつけるべきなどについてお話をうかがった。
・ビジネスプランについての学習
5 月 17 日　高校生ビジネスプラン・グランプリ事務局（日本政策金融公庫　国民生活事業本部　南近畿地区　大阪創業センター）６名来校。ビジネスプランの立て方について講義。

６月　テーマの深化と講師招聘
・テーマの深化
インターネットや書籍など、班のメンバーで分担してあたり、各自知識を深める。その後、互いに調べたこと、理解したことを持ち寄り、意見交換し、課題に対する認識を深める。
・講師を招聘し、助言を受ける。
現時点での調査・研究を通して得た事項をまとめ、課題設定・仮説・調査方法などを整理し、班ごとに発表する。その際、とよなか国際交流協会事業主任職員　山根 絵美氏から学問的指導・助言を得た。
・課題設定・仮説・調査方法などの修正
いただいた指導・助言をもとに修正して、調査・研究を深化させる。

７月　テーマの確定とフィールドワークの検討・実施
・テーマの確定
それぞれの班の最終的な課題と仮説を確定し、研究・調査を深化させる。
・フィールドワークの候補地を検討
調査対象として適当な施設あるいは専門家を探し、必要に応じて電話やメールなどで話を聞き、夏休みを利用して現地を訪問する。
・フィールドワーク実施に向けて、メールや電話によるアポイントメントの取り方について講習
社会的なマナーを身につけた上で、フィールドワーク先と応対できるよう、講習を行った。
・フィールドワーク①（４班）
株式会社ミヤコ国際ツーリストを訪問。ムスリムの方々のテーマパークの利用についての理解を深める。

８月　夏休みの課題
夏休み課題として、各班に対して（１）夏休み中にフィールドワークに行く、（２）これまでの課題研究についてまとめるレポートを提出する、のいずれかを選択させ、各個人に対しては、中間発表に向けて「口頭発表で使用するスライド」および「要旨」の下書きの提出を求めた。

・フィールドワーク②（１班）
茨木モスクにてムスリムの方々にハラルフードやヴィーガン料理は需要があるかについてアンケート調査を行った。
・フィールドワーク③（２班）
大阪イスラミックセンターにてムスリムの方々に日本での観光について不便なことや問題点がないかアンケート調査を行った。
・フィールドワーク④（３班）
レンタル着物店夢館五条店にて和柄ヒジャブの需要があるのかインタビュー調査を行った。
・フィールドワーク⑤（４班）
大阪イスラミックセンターを訪問。日本のテーマパークにおけるムスリムの困難は何か理解を深めるためアンケート調査を行った。
・フィールドワーク⑥（５班）
株式会社坂ノ途中にてイエメンコーヒーの流通や生産者についてなどインタビュー調査を行った
・フィールドワーク⑦（６班）
神戸モスクにてムスリムの方々にヒジャブや礼拝マットの入手方法についてアンケート調査を行った。
・フィールドワーク⑧（７班）
神戸大学国際教育総合センター　黒田千晴准教授にムスリム留学生の学生生活についてインタビュー調査を行った。
・フィールドワーク⑨（８班）
エイエイエスケータリングへハラルフードの事業の取組みや困難、提供する際に気を付けていることについてインタビュー調査を行った。
・フィールドワーク⑩（９班）
Washoku Home Cooking　Machiko を訪問し、松本真智子さんにムスリムフレンドリーについてやムスリムの方々が好む和食についてインタビュー調査を行った。

９月　課題研究中間発表会の準備
・研究成果の整理①
夏休み終了後の授業において、夏休みの課題の結果を持ち寄り、各班で「スライド」および「要旨」を相互評価させ、中間発表に向けて土台とする作品を決めさせた。

・中間発表会準備
口頭発表のための資料の作成および練習を行う。
・フィールドワーク⑪（１班）
パプリカ食堂へインタビュー調査を行い、作成したフードピクトシールを実際にメニューに貼付することがヴィーガンレストランに受け入れられるか調査した。
・フィールドワーク⑫（４班）
大阪、東京、長崎３つのテーマパークへ電話によるインタビュー調査を行い、ムスリムへの対応の現状を調査した。

10 月　課題研究中間発表会
・中間発表会での助言
いただいたアドバイスを基に、研究の方法を再度検討する。

11 月　調査・研究
・研究の整理①　三角ロジック講習会

論理的思考・表現のツールとして「三角ロジック」を用いて、簡単なワークを行い、その後、自分たちの研究が論理的に成り立っているかどうか、実際に自分たちの研究に当てはめて検討した。

・フィールドワーク⑬（２班）
茨木モスクにてムスリムの方々に日本での観光地について課題がないかアンケート調査を行った。

・フィールドワーク⑭（３班）
茨木モスクにてムスリムの方々に和柄ヒジャブについて需要があるか和柄に対してどう思うかアンケート調査を行った。

・フィールドワーク⑮（４班）
Washoku Home Cooking Machiko にて松本真智子さんからテーマパークで提供するヴィーガン料理の試作品について意見をいただいた。

・フィールドワーク⑯（５班）
校内にて教職員対象にイエメンコーヒーの試飲会を行い、アンケート調査を行った。

12 月　調査・研究

・研究の整理
中間発表後に深めてきた研究を整理するために、７月に行った「課題研究　研究発表の骨子」の作成を再度行った。生徒たちは２学期の間に新たにフィールドワークへ行ったことやアンケート調査を行ったことを、７月に作成した「研究発表の骨子」に追加し作成した。各担当教員で点検し、生徒に返却した。

・スムーススペースを使用した JICA 職員との交流
スムーススペースを使い、JICA 職員と交流を行った。ムスリムである職員に対して、研究を進めている上で生じた疑問をたずねることができ、適切なアドバイスをいただくことができた。

・フィールドワーク⑰（２班）
JICA 東京出張出前講座でムスリムの方々に日本で感じた偏見についてインタビュー調査を行った。

・フィールドワーク⑱（３班）
JICA 東京出張出前講座でムスリムの方々に和柄ヒジャブについてインタビュー調査を行った。

・フィールドワーク⑲（４班）
茨木モスクにて試作品のヴィーガン料理を試食してもらい、ムスリムの方々から味付けなどの意見をいただく。

・フィールドワーク⑳（６班）
神戸モスクにてムスリムの方々に日本製のヒジャブや今治タオルの礼拝マットは需要があるのかアンケート調査を行った。

・フィールドワーク㉑（７班）
大阪大学　国際交流サークル B.S.P（Brothers and Sisters Program）のムスリム留学生へ日本での生活や日本人学生との交流についてインタビュー調査を行った。

・フィールドワーク㉒（８班）
大阪大学　国際交流サークル B.S.P（Brothers and Sisters Program）のムスリム留学生に日本での買い物で困ることについてアンケート調査を行った。

・フィールドワーク㉓（９班）
株式会社ローソン　大阪大学豊中キャンパス店へハラル対応商品への店内ポップを作成し、店内での設置を提案する。

12 月　冬休みの課題

各班に対して、課題研究成果発表会に向けての①要旨、②ポスターまたはスライドを作成し、提出を求めた。また、各個人に対しては、論文執筆に向けての③ワークシートを課した。①～③については、不十分な点や補強が必要な部分に朱書きし、生徒に返却。これらをもとに、生徒たちは再検討を行った。

１月　課題研究成果発表会への準備

・研究成果の整理③
　最終的な研究結果として整理する。
・成果発表会への準備
　ポスター作成・口頭発表用スライド作成
・フィールドワーク㉔（７班）
　これまで行ってきてインタビュー調査をもとにムスリムとの関わり方について知識を深めるためのマニュアルを作り、それを校内で配布し知識が深まったかアンケート調査を行った。
・フィールドワーク㉕（８班）
　株式会社ローソン大阪大学豊中キャンパス店に対して、ハラル対応商品への店内ポップの設置を求めていたが実現できなかった経緯を聞いた。

２月　課題研究成果発表会

・発表後、外部来賓・運営指導委員から助言をいただき、生徒相互にコメントシートを書かせ、その後の課題研究で共有した。
・個人論文の執筆・提出

（７）課題研究の成果

■課題研究活動

・今年度も、各班において話し合い、自分たちでフィールドワーク先を選定し、必ず１回はフィールドワークに行くようにした。多くの班では２回フィールドワークを行った。２回フィールワークに行かなかった班でも、メールや電話などにより、モスクや企業に対して質問・アンケート・インタビュー調査を行った。過去のフィールドワークの積み重ねにより、先輩たちが行ったフィールドワーク先に行くことが多くみられた。一方で、今年度から課題研究対象生徒の人数が倍増し、班数も増加していることから（30 人→44 人；７班→９班）、フィールドワーク先も増加し、行先も多様であった。このことから各班の研究のテーマがより幅広いものとなったと考えられる。
・昨年度の課題として、イスラームおよびムスリムに対しての基本的な理解が少ないという結果を考慮して、課題研究をはじめた早い段階（５月）に、ムスリム対応に関する専門家を招き、VISION３、４の生徒を対象に講演会を開催した。講演会を通じて、ムスリムの方々が日本においてどんな困っているのかを聞くことにより、研究をはじめるきっかけを得た。
・フィールドワークにより各分野の専門家の方々に直接会い、お話をうかがうことにより、生徒たちは活きた情報を得ることでき、イスラームに関して体験的に理解を深めることができた。理解が深まると、研究への興味関心もさらに増し、課題研究活動に向き合う姿勢も向上した。
・今年度からの取組みとして、自分たちの研究を整理し、深化させるツールとして、昨年度の「ミニマムブロック」を進化させた「研究の骨子」や、「論文の構造」を用いた。前者は７月と 12 月に行い、これまで先行研究・フィールドワークから得た知識を整理するとともに、もう一度自分たちの研究の意義・目的・仮説などを再検討した。11 月には、研究を整理する考え方として「三角ロジック」についての講義を行い、自分たちの研究の論理的構造について考察させた。「論文の構造」は、冬休みの課題と、個人論文執筆に向けた取組みとして行った。「論文の構造」では、学術論文の構造について理解させ、自分たちの研究について「事実・方法・結果・考察」などのカテゴ

リーごとに紙媒体へ詳細に記述させた。これら作業を通じて、自分の研究の中で結果が出ている部分・不足している部分、結果から何が言えるのかなどについて、改めて気づくことができた。

■大学進学関係

・昨年度 VISION３生徒４名が、関西学院大学の「スーパーグローバルハイスクール対象公募推薦入学試験」を受験し、３名が合格した。

■各種コンテスト・発表会

・12 月 26 日　高校生ビジネスプラングランプリ　南近畿地区　表彰式　出席
４班が『ムスリム Enjoy プロジェクト』プランで、高校生ビジネスプラングランプリ BEST100 に選出される。表彰式において、同プランの口頭発表を行った。
＊本校の課題研究チームとして、初めて BEST100 に選ばれた。

（８）課題研究の今後の課題

■イスラームとの関連性

・昨年度の課題から、今年度は早い時期にイスラームに関する講演会を実施し、基本的理解の充実を図った。講演で聞いたことをきっかけとして研究を進めた班や、講演後も講師からアドバイスをもらう班も出てきた。一方で、講演会などに時間を割いたために、書籍や論文を読む時間を十分にとることができず、インターネットを通じた情報の収集が多く、さらに深いところまで追究できた班が少なかった。６月頃に一度しっかりと先行研究の論文を読む時間を取る必要がある。

■実践

・昨年度は、フィールドワークに行ったことを「結果」として満足していたという課題があったが、今年度は 12 月頃にもフィールドワークに行く班が多数おり、先に研究を進めようとしていた。しかし、発表会までの時間が少なく、研究終盤は分析・発表準備に追われていたこともあり、年間スケジュールをもう少し前倒しできるように見直す必要がある。

・VISION３の１つの目的である「ソーシャルビジネスプラン」を提案するまではできなかったが、課題研究班ではじめて「ビジネスプラン」を提案できたことは成果であった。年度の早い時期に「ビジネスプラン」についての講演を企画したことも、生徒の動機づけになったと考えられる。一方で、「ビジネスプラン」を立てることができたのは１班だけであったので、今後は多くの班が「ビジネスプラン」だけではなく「ソーシャルビジネスプラン」を社会に対して提案できるようする必要がある。また、より実践的なビジネスプランが提案できるように、ビジネスに関する基礎的知識を獲得し、専門家からアドバイスをもらえるような環境を整備する必要がある。

写真①:課題研究授業 VISION3の様子

写真②:スムーススペースを利用した JICA 東京職員とのテレビ会議

第４項　GLOBAL VISION 目的４【担当：井上望（国）・丹波大軌（英語）
手代木佑衣子（芸術）】

（1）テーマ	日本とイスラームから創造する新たなスタンダード －　比較文化的観点からのビジネス提案　－
（2）学年	2年生文理学科
（3）対象人数	70 人（男子　9人、女子　61 人）
（4）班のテーマ	①在日ムスリムの埋葬と日本人の理解の拡大方法の検証
	②ムスリムが快適に働ける職場にするための検証
	③イスラームのイメージを改善するためのイスラーム検定草案の作成
	④ハラールフードを同世代の人たちに広めよう
	⑤ムスリムの方が日本に困らないためには ～インターネットを使ってハラル対応の食品を紹介する～
	⑥ハラルフードと教育～未来を見据えた education plan～
	⑦お祭りを通して文化を理解する　～イードを楽しもう～
	⑧ムスリムに日本食を楽しんでもらうための方法の検証
	⑨訪日ムスリムのための礼拝マップの作成
	⑩ムスリム対応する企業をムスリム留学生に紹介する方法の提案
	⑪日本人とムスリムの相互理解のために
	⑫ムスリムが快適に日本で過ごすために
	⑬誰もが偏見をなくせる世界なのに…
	⑭物語で伝えるイスラーム
	⑮ムスリムの国際結婚のハードルを下げる
	⑯イスラーム諸国の女性観
	⑰ググってコーラン

（５）目的と仮説（構想調書より）

VISION４が当初から掲げてきた目標は次の通りである。「トルコのビジネス・スタイルは、信頼関係にもとづき、客人を厚遇してもてなす意識が強く、日本にとっては比較的理解しやすい市場である。さらに、トルコの EU 非加盟により、トルコが、中東・中央アジア・北アフリカ市場へのハブ拠点としてますます重要になってくる。また、インドネシアも、日本との経済上の相互依存関係を背景に、友好協力関係が一層緊密化している親日国である。トルコやインドネシア等イスラーム諸国の衣食住、文芸等の諸文化と日本文化を比較研究することで、その共通性、相違性を明らかにし、比較文化的観点から欧米中心のグローバルスタンダードにとらわれない、日本とイスラームの新たなビジネス・スタンダード・モデルを提案する。」

以上の目標に向かって、イスラーム諸国の衣食住、文芸等の諸文化について文献等を中心に調べるとともに、イスラーム諸国出身者や連携大学の留学生や来日高校生・大学生、さらに宗教関係者、サービス関係の企業、NPO からも情報を収集する。そうした過程を通して、日本文化との共通性・相違性を整理しまとめるとともに、イスラーム諸国の人間観・社会関係観・ビジネススタイル等の理解と共同をめざし、日本とイスラームの新たなビジネススタンダード、また新たな国際貢献となりうる要素を導き出す。

（６）課題研究の概要

４月　課題研究開始
・研究班を作る。

VISION４が掲げる目標を前提に、生活・芸術・文学・教育・科学・国際貢献の分野ごとに、各自研究したいテーマについて聞き取りを行い、大きく３グループに分ける。そしてその中で、テーマを研究する意義や方法などについて意見交換し、それぞれのテーマの中で方向性の近い生徒同士によって最終的に 17 の研究班を結成する。

・講演

非ムスリムの日本人で、日本でムスリムを支援する活動を行っている一般社団法人日本ムスリム支援協会の代表理事である松本真智子氏による、イスラームについて初歩的な知識の確認及びムスリム支援活動の内容等の講演を聞き、テーマ設定前により研究への意欲を高める。

５月　課題を仮決定し、正式な課題へと深化させる。

・研究班ごとに仮の課題（テーマ）を確定する。

以下の手順で、それぞれの研究班のテーマを確定する。

①「イスラーム」「比較文化」「国際貢献（ビジネスモデル）」をキーワードに、メンバーそれぞれが候補となる課題を提示する。

②提案された課題について、どのような仮説が考えられるか検討して、研究対象としてより有意義な課題を絞り込む。

③絞り込んだ課題について仮決定をして、そのテーマに沿って、調査・研究の方法を考える。

・ビジネスプラン講座

・調査・研究①

－ 資料の探索

書籍やインターネットなど、班のメンバーで分担してあたり、各自知識を深める。その後、互いに調べたこと、理解したことを持ち寄り、意見交換し、課題に対する認識を深める。

６月　講師からのアドバイス①

・課題設定・仮説・調査方法などの整理

現時点までの調査・研究を通して得た事柄をまとめ、課題設定・研究の意義・仮説・調査方法・リストアップした文献や論文などを整理し、事前に講師に知らせる。

・講師を招聘し、アドバイスを受ける。

整理した「課題設定・仮説・調査方法」などを班ごとに発表する。その際、関西学院大学総合政策学部教授　高畑由起夫氏から学問的指導・助言を得る。さらにイスラーム世界の多様性とネットワークについての講義を受ける。

・課題設定・仮説・調査方法などの修正

アドバイスをもとに、修正すべき点を明確にして新たな文献や論文をリサーチし、さらに調査・研究を続ける。

７月　課題設定の確定

・調査・研究②

・課題の最終確定

それぞれの班の最終的な課題と仮説を確定し、研究・調査を深化させる。

・夏季休業中の資料収集、フィールドワークの計画立案

・フィールドワーク①（６班）

在日ムスリムが経営する「アリーズキッチン」に訪れ、ハラルフードの基礎知識をはじめ、日本でのハラールレストランの経営について、また日本におけるハラルフードのさらなる普及について意見を聞く。

・フィールドワーク②（７班、10 班）

NPO 法人「日本ハラール協会」を訪問。会長のレモン史視氏に日本人のイスラームに関する知識の普及の現状についての話を聞く。

8月　夏休みの課題

・調査・研究③

・フィールドワーク③（５班）

日本食レストラン「祭」を訪れ、ハラルフードやムスリムフレンドリーの概念についての基礎知識や、日本人がムスリムフレンドリーレストランを経営する際の注意点等についての聞き取り調査を行う。

・フィールドワーク④（４班、８班、11 班）

「Wasyoku Home Cooking　MACHIKO」を訪れ、イスラーム教に関する基礎知識をはじめ、ムスリムフレンドリーでの和食を自分たちで作る際に気を付けるべきこと等の聞き取り調査を行う。また、研究について助言も聞く。

・フィールドワーク⑤（２班）

ヤンマー株式会社本社を訪れ、ムスリムの働きやすい職場づくりについて食堂でのムスリムフレンドリーメニューの提供についての経緯、実際の運営方法、祈祷室の確保などについての聞き取り調査を、実際に施設の見学も含めて行う。

・フィールドワーク⑥（14 班・17 班）

「神戸イスラミックモスク」を訪問し、礼拝を見学するとともに、ムスリムの習慣について指導者や一般のムスリムに話を聞く。

・フィールドワーク⑦（１班、３班、９班、12 班、15 班）

大阪府茨木市にある「茨木モスク」を訪問。イマームと質疑応答・意見交換を行い、信者の方へのアンケート調査を行う。

・フィールドワーク⑧（16 班）

「アムネスティ・インターナショナル大阪支部」を訪問し、研究の進め方について助言を得る。

9月　課題研究中間発表会の準備

・研究成果の整理①

夏休みの課題の結果を持ち寄り、現時点での研究成果をまとめる。

・調査・研究④

・中間発表会準備

口頭発表のための資料の作成および練習を行う。

10 月　課題研究中間発表会

・中間発表会での助言

いただいたアドバイスを基に、研究の方法を再度検討する。

・調査・研究⑤

オーストラリア高校教員視察

・英語での口頭発表（２班）

11 月　研究の深化

・調査・研究⑥

・企業への聴き取り①（２班）

UHA 味覚糖株式会社、エースコック株式会社、マンダム株式会社を対象にメールでのムスリム社員の雇用についてのアンケート調査を行った。また、株式会社エイチ・アイ・エスにインタビュー調査を行った。

・骨子の作成

三角ロジックについての講義および演習を行い、それに基づき研究の骨子プリントをまとめる。

12 月　研究の深化

・フィールドワーク（10 班）
　大阪大学　国際交流サークル B.S.P（Brothers and Sisters Program）でのムスリム留学生への日本での就職に関するアンケート調査を行う。
・研究協力依頼（11 班）
　一般社団法人日本ムスリム支援協会の代表理事である松本真智子氏に作成した動画を送付し、ムスリムにとって不快なものでないかの確認と助言をいただく。
・JAICA 東京による遠隔授業（７班、11 班、17 班）
　ムスリムの方２名に研究内容発表及びインタビュー調査実施
・フィールドワーク（12 班）
　「茨木モスク」を訪問し、研究のためのアンケート調査を行う。
・冬休みの課題　論文執筆①
　論文執筆の準備のためのワークシート①の記入

１月　課題研究成果発表会への準備

・フィールドワーク（14 班）
　「国立民族博物館」で研究のための情報収集を行う。
・研究協力依頼（２班）
　ハラルジャパン協会へのムスリム雇用についてのメールでのインタビュー調査を行う。
　豊田鉄工株式会社にパンフレットについてのインタビューを行う。
・論文執筆②
・研究成果の整理
　最終的な研究結果として整理する。
・成果発表会への準備

２月　課題研究成果発表会

・発表後、指導助言を得る。
・論文執筆③
・大阪シーフードショーにおいて、ハラルジャパン協会のブースにパンフレットを設置（２班）

（７）課題研究の成果

■課題研究活動

今年度は VISION４の人数が倍以上にという大幅な人数増加があったものの、教員の人数は据え置きであった。しかし、前年度までの積み重ねを基に生徒の研究活動をすすめることができた。内容については、昨年度に引き続き自ら実践し答えを探すということを促しており、どの班もフィールドワークや企業や法人への研究依頼、大学のサークルへのアンケート調査依頼やパンフレット作成、サイト作成、指導案作成等、生徒たちが主体的に動くことができていた。従来は実践するだけで終わってしまっているところもあったように感じるが、実践の結果を分析するためのデータ収集にも取り組めるようになってきている。これは課題の早期設定のために最初にイスラームに関する講演を聞き、問題意識を持つように促したことと、研究の過程で研究の骨子を確認するワークや三角ロジックの講義をすることにより、より自分たちの研究が論理的なものであるかを確認する機会があったためと考えられる。この点が、運営指導委員会の中で５年前より情報の収集がなされており、研究が深化していると評価された部分であると思われる。

また研究を進める過程で、積極的に企業や法人との連携も行うことができた。その成果としては、２班が企業向けのムスリム対応についてのパンフレットを作成した結

果、作成時に研究協依頼をした（一社）ハラル・ジャパン協会より、大阪シーフードショーの同協会のブースにパンフレットを設置する旨の声がかかったことや、(一社)ムスリム支援協会の松本真智子氏に協力依頼をしたムスリムフレンドリーのレシピ紹介動画（11 班が作成）を同氏の SNS にて掲載していただいたこと等が挙げられる。

課題研究発表会では、それぞれが意欲的に身振り手振りなども加えつつ、ポスター発表を行う姿が見られた。質疑応答では、質問者も積極的に疑問に思う点を探して発問し、応答も１年間の研究の積み重ねを基に対応することができ、そこで得た気づきを論文にまとめられることができており、発表の場がより有意義なものになっていると感じる。

５年間の蓄積として課題研究の流れが確立してきており、研究の骨子や論文のワークシートなどのツールの開発、使用方法についても教員間で浸透してきており、次年度以降につながる様式が形成されているように思う。本校の SGH 事業は今年度で終了するが、５年間で培ってきた研究の流れや、企業や法人にご協力いただいてきた人脈の蓄積をもとにグローバルな視点を持ちつつ、さらに多様化していく研究の発展をめざしたい。

■各種コンテスト・発表会

・WWL・SGH×探求甲子園　口頭発表エントリー（７班）
ポスター発表　出場（１班）
ラウンドセッションエントリー（17 班より１名）

■大学進学関係（関西学院大学 SGH 入試）

昨年度の VISION４からは計２名が関西学院大学の「スーパーグローバルハイスクール対象公募推薦入学試験」を受験し、２名ともに合格した。

オーストラリア高校教員視察での発表の様子

第３節　SG 課題研究Ⅱ

第１項　昨年までの取組みや課題

本校の課題研究では２年の最後で論文を執筆させるカリキュラムになっているが、執筆指導の段階に非常に多くの問題が発生する。その問題は序論－本論－結論という論文特有の構成に関わるものだけでなく、主述のねじれや段落の分割といった基本的な文章作法にまで及ぶ。そこで、第２学年の SG 課題研究Ⅰで一度論文を書き上げて、研究を一度完結させておいた後、３年になって再度、SG 課題研究Ⅱで文章作法や論文作法などいわゆるアカデミック・ライティングを学ぶ機会を持つこととした。方針転換の初年度にあたる昨年度は、主にパラグラフ・ライティングと三角ロジックの二つをワークシートの形で協働的に学習し、最後に論文を４ページ程度にまとめなおすように設計した。

昨年度は初年度ということであり、教材を設計するだけで精一杯であった。また、授業を担当した教員からは、もう少し一つ一つの手法について練習する時間を確保したほうがよい、評価をどのように簡便に行うかが問題との指摘があった。今年度はこれらの点について改善を図った。

第２項　実施内容

今年度は三角ロジックの取り扱いをやめ、パラグラフ・ライティングのみとし、その代わり相互評価を取り入れた。教材は主に英語圏の学校における作文の授業の教科書を参考にして、SSH 研究開発委員会と SGH 研究開発委員会、授業担当者が共同で編集し、授業は担任または副担任が担当した。

資料５　SG 課題研究Ⅱ（1 学期＋1 回）

回	内容	詳細
1	ガイダンス、ダメ文あるある	生徒の論文で散見される読みづらい文章を題材にした講義と問題演習
2	例示パラグラフの書き方	ブレインストーミング、クラスタリング、アウトライン、本文執筆の四つのワークシートを用いて、「他己紹介」のパラグラフを執筆する。
3	例示パラグラフの演習	ブレインストーミング、クラスタリング、アウトライン、本文執筆の四つのワークシートを用いて、「志望理由書」のパラグラフを執筆する。
4	定義パラグラフ、比較・対照パラグラフ	比較表のワークシートを用いて、指定された題材についての比較・対照パラグラフを執筆する。
5	相互評価①　1～4 回の成果物の相互評価（中間評	相互評価表を用いて、生徒間で第一回から第四回までで執筆した文章を相互評価した上で、リフレクションを行う。

	価）	
6	研究論文の分析、論文を構成する要素の再確認	課題と仮説の関係について復習した後、論文(*)を読み、論文の構成を分析するワークを実施。次いで、自分の研究についてアウトラインを作成。 *今年度は「理学療法科学 24(3)：463-466（2009）」を使用。
7～9	論文執筆	論文の執筆。
10	相互評価②　論文の相互評価（最終評価）	相互評価表を用いて、生徒間で執筆した論文を相互評価した上で、リフレクションを行う。

今年度は一つ一つの手法についての練習時間の確保をするために、三角ロジックの扱いを取りやめ、パラグラフ・ライティングに絞った。また、評価を簡便にさせながら、さらに生徒自身の学びを深化させる目的で相互評価を盛り込んだ。

第３項　結果と分析

今年度の改善点のうち、三角ロジックを扱わず、パラグラフ・ライティングと相互評価に絞った点については、指導担当者から異論は出なかったので、来年以降もこの形式をとるべきと考える。

パラグラフ・ライティングの方法論については生徒にとっておおむね理解しやすく、多くの生徒がその有用性を実感することができている。しかし、一方で「コントローリング・アイデア」という考え方については、あまりなじみがなく、非常に難解であるため、生徒が本質的に理解できているとは言い難い。これはもう少し教授法の研鑽が必要であると考える。

ある生徒が２年次に執筆した論文の初稿とこの授業の第７～９回でブラッシュアップした改訂稿の一部分を資料８に示す。２年次の初稿では、時系列に沿って書かれているため、調査によって整理された事実と自身が研究で明らかにした事実が混在しており、研究記録のサマリーに近い形であった。一方で、３年次の学習を経ると、それが上手く整理されており、研究の意図や新規性、主張が明確になっている点で非常に読みやすくなっている。このように論文の構成が整理された生徒がおおよそ７割を超え、カリキュラムが有効に機能していることが示唆された。また、生徒自身のリフレクションを分析しても、概ね学習内容を理解しているようであった。

一方で、生徒間の相互評価についてはまだ改善の余地が残る。相互評価表の一部を資料６、７に示す。資料６は第５回の中間評価の評価表であるが、理解しやすい評価表を意識するがあまり、多くの生徒がみな満点で、生徒たちに次の課題を示唆することができていなかった。資料７は第 10 回評定に用いた最終評価表である。論理が整っているかどうかを評価項目に含めたが、論理についての理解が不十分な生徒は他者の文章を読んでも論理を

すくい取ることができずに、学習効果が高いとは言えなかった。

また、現代文の問題演習以外に、A４数枚分の長さの文章を読む機会がない生徒が多く、評価の途中で集中力が途切れたりする生徒も多い。これらの点については今後も研究を重ね、高校三年間全体で学術論文などの論理的文章を読みこなす力、書きこなす力の双方の能力を育てていきたい。また、来年度は２年次で執筆した論文との相違点を各自で分析するなど、相互評価だけではなく各自の省察を促し、学びをさらに広げていけるような資質へと迫れるように、検討していきたい。

チェックリスト

チェックポイント	得点
① 誤字や脱字，文法の誤りなどが全くなかった。	+3
② トピック・センテンスが書かれており，コントローリング・アイデア※1が含まれており，続く比較項目ときちんと噛み合っている※2。 ※1 相違点があることを前提にしたパラグラフなので，「違いがある」はコントローリング・アイデアとはみなさない。共通点や差異があることで結果どういうことにつながるのかが書かれていればOK ※2 コントローリング・アイデアが「可能性を見出せる」となっている場合，サポーティング・センテンスが「可能性を見出せる」ことを説明していなければならない。そこまで可能性を見いだせそうな比較を行っていない場合はアウト。	+5
③ トピック・センテンスが書かれており，コントローリング・アイデアが含まれているが，続く比較項目と噛み合っていない。	+3
④ トピック・センテンスらしきものはあるが，コントローリング・アイデアが含まれていない。	+1
⑤ トピック・センテンスがない。	0
⑥ 比較表を書いてみると，表に抜けや漏れがない。	+5
⑦ 比較表を書いてみると，表に一箇所ぐらい抜けや漏れが見られる。	+3
⑧ 比較表を書いてみると，表に複数箇所の抜けや漏れが見られる。	0
合計点	

資料６　中間評価のチェック表（抜粋）

(8) パラグラフ・ライティングでは，「一つのパラグラフにトピック・センテンス（テーマとコントローリングアイデアを含む文）が一つ含まれる」と決まっていました。言いたいことがいくつも含まれている長大なパラグラフだと，何が重要で何が重要でないかわからなくなります。論文全体を読んで，チェックしてください。

- 「言いたいこと（主張・トピック）が２つ以上入っているパラグラフ」は１つもない 。
- 「言いたいこと（主張・トピック）が２つ以上入っているパラグラフ」が１つある
- 「言いたいこと（主張・トピック）が２つ以上入っているパラグラフ」が２つ以上ある

研究論文は研究成果を伝えるための文章ですので，研究内容が書かれていなければなりません。今回は研究の最小構成として，

① 先行研究
② 調査課題ー仮説ー結論　　の三つに絞ってみます。

先行研究をあげる目的はすでに明らかになっている点を示し，それ以上は明らかになっていないことを宣言するためです。自分の体験談や普段から感じている疑問だけを挙げているものは研究課題の提示としては認められません。

(9) 「課題」に当たる部分（課題の歴史的意義，課題の分析，課題の提示など，課題にかかわる部分すべて含む）で，先行研究についての記述があるかどうかをチェックしてください。

- 「課題」について述べている部分のどこかで先行研究について触れている。
- 「課題」について述べている部分で先行研究について触れていない 。

調査課題（以下，課題），仮説，結論はおおよそ次のような性格を持たなければなりません。

① 調査課題･･･研究の中で明らかにしたい問い。検証可能な問いの形式で書かれる。目的ではない。
（例）どのようにすれば，ムスリムへの理解や認知度が上がるのか。
② 仮説･･･調査課題に対する答えや見通し。研究の前に考え出される。
（例）幼少期の教育を充実させれば，ムスリムの認知度や理解度は上がるはず。
③ 結論･･･仮説は真だったのか偽だったのかの判定。
（例）たしかに上がった。

(10) 課題，仮説，結論を探し出してみてください。その後，それら三つの部分をつなげて読んでみたときに，次の中で当てはまるものをすべて選んでください。

- そもそも課題の提示がない。
- 課題の提示らしきものはあるが、課題の体をなしていない。（問いの形式になっていない）
- 仮説の提示がない。
- 仮説の提示らしきものはあるが、仮説の体をなしていない。（命題の形式等になっていない）
- 結論の提示がない。
- 課題と仮説が対応していない（仮説に入ったときに課題で触れてもない話が出てくる）。
- 仮説と結論が対応していない（結論に入ったときに仮説で触れてもない話が出てくる） 。

資料７　最終評価のチェック表（抜粋）

動画を用いてムスリムへの偏見をなくす

１．研究動機と目的

現在、日本において、ムスリムが非ムスリムの言動によって傷つくといった事例が存在する。これらは知識不足におけるムスリムへの偏見から生じている。

今後、日本に住むムスリムが増えていく中で、人権保護、および多文化共生という点から考えてもムスリムが暮らしにくい環境うは改善されるべきである。本研究は、ムスリムへの偏見が蔓延する現状を変えるために、ムスリムについての知識を非ムスリムに広めていくことを目的とする。

２．探究の方法

まず、知識を広めていくにあたって、より効果的かつ影響力のある方法を検討した。そこで、人は、９割以上の情報を視覚と聴覚から受け取るというデータをもとに、動画という手段を用いることが最善ではないかと考えた。

１）イスラームについての知識を深めるため、イスラームに関する書物を読み、また、日本ハラール協会を訪れて、ムスリムの困っていることやあまり知られていないイスラム教の文化や教えなどを学んだ。その後、動画を作成した。
２）冬休み期間に、豊中高校の１年生 39 人を対象として、イスラム教についてどのくらいの知識があるのかを検証するため、イスラム教について問うアンケートに答えてもらった。
３）アンケートに答えた後、私たちの作成した動画を視聴してもらった。
４）動画を見る前に回答してもらったアンケートの質問内容と全く同じ内容のアンケートに再び答えてもらった。

３．探究の内容

まず、実際に偏見が原因となりムスリムが傷つけられている事例についてどのようなものがあるのか調べた。
＜偏見による被害の事例＞
・日本の小学校に通うムスリムの子供が給食を食べられないため、ハラルフード（イスラム教で食べることが許されている食事や料理）を学校に持ってきた際にクラスメートから暴言を吐かれた。
・ムスリムの女性が街中でヒジャブ（ムスリムの女性が肌や頭髪を隠すために身に着ける布）身に着けているだけで周囲から強い視線を浴びた。
・IS と呼ばれる過激派組織が「イスラム国」と名乗ることでイスラム教の事だと勘違いした人たちにムスリムが暴言を吐かれた。
他にも様々な問題はあるが、今回私はこれらの事例について着目した。
そこで、上記の事例の共通点は、非ムスリムのイスラム教への知識不足に原因があるという点だと考えた。

１）アンケートと動画を用いた調査の実施

１、はじめに

現在、日本において、ムスリムが非ムスリムの言動によって傷つくといった事例が存在する。これらは知識不足におけるムスリムへの偏見から生じている。
実際に、偏見が原因となりムスリムが傷つけられている事例には次のようなものがある
＜偏見による被害の事例＞
・日本の小学校に通うムスリムの子供が給食を食べられないため、ハラルフード（イスラム教で食べることが許されている食事や料理）を学校に持ってきた際にクラスメートから暴言を吐かれた。
・ムスリムの女性が街中でヒジャブ（ムスリムの女性が肌や頭髪を隠すために身に着ける布）を身につけているだけで周囲から強い視線を浴びた。
・IS と呼ばれる過激派組織が「イスラム国」と名乗ることでイスラム教のことだと勘違いした人たちにムスリムが暴言を吐かれた。

課題の現状

このような事例はごく一部ではあるが、これらの共通点として先程も述べた通り非ムスリムのイスラム教への知識不足に原因があると考えた。

課題の分析

今後、日本に住むムスリムが増えていく中で、人権保護、および多文化共生という点から考えても、ムスリムが暮らしにくい環境は改善されるべきである。そこで、ムスリムについての知識を広めることができれば、ムスリムへの偏見をなくすことができると考えた。

課題の提示

仮説の提示

ムスリムへの偏見をなくすことができれば、このような暮らしにくさが改善された環境をつくる第一歩になる。

仮説の発表

２、探究の方法と内容

まず最初に、イスラームについての知識を深めるため、イスラームに関する書物を読み、また、日本ハラール協会を訪れて、ムスリムの困っていることや、あまり知られていないイスラム教の教えなどを学んだ。その後、知識を広めていくにあたってより効果的かつ影響力のある方法を検討し、動画という手段を用いることに決定した。

手順と内容

大阪府立豊中高等学校